『日本語教育』論文投稿 FAQ

以下の項目については、「研究成果投稿に際しての「研究倫理」に関する留意事項」に移行しました。本文書を必ずご確認ください。

・調査対象者の人権・プライバシーの保護について（研究を始める前の注意）の全部
・「引用について」「参考文献・統計処理について」「投稿のマナーについて」の一部

書式について

Q1) 書式は，決められた書式でなければなりませんか。
A1) 決められた書式に従い，書式には変更を加えずにご使用ください。書式はこちら（和文用／英文用）を参照してください。

Q2) フォントの大きさや種類に決まりはありますか。
A2) 投稿原稿は，「『日本語教育』執筆の手引き」で示されているフォントをご使用ください。

Q3) 規定の分量に収まるように，図や表の文字を小さくしたり行間を狭めたりしてよいですか。
A3) 図表内の文字を 8 ポイントより小さくしたり行間を狭めたりしないでください。

Q4) 注は脚注ですか，後注ですか。
A4) 印刷時にはすべて後注にしますので，後注でお書きください。

分量について

Q5) 投稿の際は，規定の分量を超えてはいけないのですか。
A5) 規定の分量を超えたものは，原則として受理されませんので，お気をつけください。「謝辞・付記」の扱いについては，Q17 を参照してください。

Q6) 規定の分量より少なくなってしまいました。問題はありますか。
A6) 分量が極端に少ない場合は，内容が十分に書かれているかどうかが心配されますが，分量が少ないというだけで問題になることはありません。

引用について

Q7) 投稿者が特定できるような書き方とは，具体的にはどのようなものですか。
A7) つぎのような表現があるものは，投稿者が特定できますので，使用しないよう，ご注意ください。

・「小稿」「拙稿」「前稿」のような表現。
・自分以外の論文を「述べられている」「指摘されている」と引用しているなかで，自分の論文だけ「述べた」「指摘した」などと引用する表現。
・特定の人物や研究助成金に対する謝辞。
・「この論文は，博士論文の一部である」のような表現。

たとえば，鈴木氏が執筆した論文の場合は，
「拙稿（2006）で指摘したように，……」ではなく，
「鈴木（2006）で指摘されているように，……」のようにしてください。

※投稿者自身の既刊の著作も，●●（2006）のように，伏字（墨塗り）にはせず，著者名を含む文献情報を明記したうえで，客観的な記述となるよう努めてください。印刷中や発行予定のものの記載方法については，Q10 を参照してください。

他者の著作物等の転載・利用について

Q8) 論文中で他者の書籍から転載（図表・画像・歌詞・漫画など）をする場合は，どのような手続きをとればよいですか。
A8) 著作権法上の「著作物が自由に使える場合」に該当するか，投稿者の責任においてその要否を確認してください。著作権者の許諾が必要な場合には，必要な手続きを完了したうえで，ご投稿ください。

Q9) 論文中で他者に版権等がある尺度やテストを利用した場合は，どのような手続きをとればよいですか。
A9) 投稿者の責任において，論文内での出典表示の要否を確認してください。著作権者の出典表示や許諾が必要な場合には、必要な手続き等を完了したうえで，ご投稿ください。

参考文献・統計処理について

Q10) 投稿者自身の他誌への投稿中の論文があります。載せてよいですか。
A10) 第三者が参照できないおそれがあるものは，査読の際にも参照できないため，なるべく載せないでください。他誌で採用され，確実に刊行される印刷中のものは，本誌への投稿論文の論拠として必要な場合には,「●●（印刷中）」等として，伏字（黒丸）にして載せてもかまいません。その際，参考文献への記載は，以下のようにお願いします。

●●（印刷中）「＊＊＊（論文名）」『＊＊＊（雑誌名）』＊号

「●●」とした箇所は，本誌の査読上の匿名性を担保するため，査読を経て，本誌への投稿論文の採用が決まったあとに著者名を記載してください。記載するときは，「田中（印刷中）」「高橋（2021 予定）」のようにしてください。
なお，本文・参考文献で伏字とする箇所は新規投稿時に予め余白を確保し，採用決定後に記載する際に規定のページ数を超えないようにしてください。
これは、知人による刊行予定の論文を本誌の論拠として用いる場合も同様です。そのには,「●●（2021 予定）」と示し，採用決定後に名前を明記してください。

Q11) インターネット上のウェブサイトを引用したいです。その場合のルールはありますか。
A11) URL を明記してください。情報更新がされる可能性のあるページについては，何年何月何日に閲覧したかを記すのが原則です。ウェブサイトの具体的な引用方法は，「『日本語教育』執筆の手引き」を参照してください。

Q12) 英文の文献を載せようと思いますが，バックナンバーでは，名前の表記方法が一定でなく，ファーストネームがイニシャルのものと，すべて書いてあるものがありま

した。どちらがよいですか。

A12) APA マニュアル最新版（2020 年 3 月現在，第 7 版）に従ってイニシャルのみにしてください。詳細は「『日本語教育』執筆の手引き」を参照してください。

Q13) 統計的な検定を行うとき，効果量を報告するべきだと聞いたことがあります。効果量は必要ですか。

A13) 基本的に効果量を報告することが望ましいです。*p* 値はサンプル数の影響を受けますので，*p* 値だけでは実質的な差がどの程度なのかわかりません。*p* 値が有意でも効果量が小さい場合もありますし，*p* 値が有意でなくても効果量が大きい場合もあります。有意水準とサンプル数と効果量と検定力（検定自体の信頼性を示す数値）のうち，三つがわかれば，残りの一つも決まります。ですので，一般には効果量を示すのが望ましいですし，*p* 値が有意でない場合も効果量と合わせて *p* 値を報告するなど，データの検証に必要な数値を報告することが望まれます。資料の例を以下に掲げます。

水本篤・竹内理（2008）「研究論文における効果量の報告のために　―基礎的概念と注意点―」『英語教育研究』31 (2008), 57-66.

投稿のマナーについて

Q14) 投稿時には誰かに原稿をチェックしてもらったほうがよいでしょうか。

A14) 日本語が第一言語であっても，そうでなくても，文法・語法の誤りや誤字・脱字がいくつもあると査読者の印象を左右します。必要に応じてチェックを依頼することをお勧めします。日本語を第一言語としている人なら誰でもできるわけではないので，専門的な知識のある人に依頼する方がよいと思います。英文論文を投稿する場合も同様です。日本語論文，英語論文とも，アカデミックな論文にふさわしい表現であることが求められます。

Q15) 学会誌に論文を 2 本同時に投稿してもよいですか。

A15) まったく異なる内容であれば，2 本同時に投稿することは可能ですが，次のような場合は，投稿をおやめください。一つの論文で発表できる研究を分割して投稿する，研究グループで同一に近い内容を，第一執筆者を変えて 2 本投稿する，などといったことは，投稿倫理に反します。

Q16) すでに一度本誌に採用されたことがある者です。そのときと研究の方法は同じで，対象を変えて投稿しようと考えています。投稿してもかまいませんか。

A16) 慎重に検討したうえであればかまいません。対象を変えた新たな研究にどのような研究上の価値があるのかを明確に記述した上で投稿してください。

Q17) お世話になった先生に謝辞を書きたいです。謝辞を書いて投稿してもよいですか。

A17) 特定の人物に宛てた謝辞や，科研費などの研究助成への言及（付記）は，投稿者を特定することにつながりますので，投稿時には書かないでください。採用が決まったあとに加える分にはかまいません。その際に規定のページ数内を超えないように，新規投稿時に予め謝辞等を追記するための余白を確保しておいてください。

投稿のカテゴリーについて

Q18) 投稿のカテゴリーにはどのようなものがありますか。
A18) 論文（①研究，②実践，③調査），研究ノートがあります。詳しくは，「『日本語教育』投稿要領」をご参照ください。

Q19)『日本語教育』には，論文（①研究）・研究ノート以外に，なぜ論文（②実践）・論文（③調査）というカテゴリーがあるのですか。
A19)論文（①研究）・研究ノートとして掲載される研究成果は，日本語教育学の理論的な発展に貢献する重要な成果です。一方，本学会の会員の多くは，日本語教育の現場で日々教育実践に取り組んでいる日本語教師です。教育現場への応用に直結する実践や調査もまた，会員同士の情報共有や相互啓発をうながす立派な研究です。そうした研究成果を投稿するカテゴリーとして，論文（②実践）・論文（③調査）が用意されています。

Q20) 論文（②実践、③調査）は論文（①研究）より価値が低いという意見を耳にしました。本当ですか。
A20) 決してそうではありません。研究の目的によって区分された下位カテゴリーの違いにすぎず，その価値を同じものさしで測れるものではありません。いずれも読者となる日本語教育学会会員にとって，貴重な知見を提供する研究であるという点に変わりはありません。

Q21) 論文（①研究）のカテゴリーの中に，「～総合的に概観，展望する論文」とありますが，これは，どのような論文のことですか。
A21) 「『日本語教育』投稿要領」の論文（①研究）の説明の中でも記述していますが，「～総合的に概観，展望する論文」とは「重要な課題に関する国内外の諸研究を対象データとして幅広く検討し，独自の観点から総合的に概観，展望する論文」のことです。その論文の内容については，単なる先行研究の網羅や総括ではなく，日本語教育研究の新たな思潮に関して特定の分野におけるテーマに焦点を当て，系統的に概観・検討し，課題の整理や評価・展望を行っていることが期待されます。

Q22) 研究ノートは論文（①研究）とはどのように違うのですか。
A22) 論文（①研究）では，「明確に設定された研究課題に対し，データの分析に基づく解答を示す」ことが求められるのに対し，研究ノートについては，必ずしも厳密な意味での実証は求められていません。ただしそれは，研究ノートは論文（①研究）に比べ審査が甘い，ということを意味するものではありません。研究ノートは，現時点では厳密な意味での実証には至らなくても，近い将来優れた研究につながっていくであろう内容を積極的に速報し，学会の中で議論を促していく，というところに意義があります。具体的には「『日本語教育』投稿要領」にあるように，「新しい事実の発見，萌芽的研究課題の提起，少数事例の提示」などが記述されていることが求められます。また査読に当たっては，研究としての完結性より，速報性，話題性，発展性が重視されます。「速報性，話題性，発展性」の具体的な内容をつかむには，過去の学会誌の「研究ノート」を参考にされることをお勧めします。研究ノートも論文に準ずる文章ですので，「研究としては未完結」であったとしても，「内容的には完成」している必要があります。ドラフトのような状態のものを研究ノートとして投稿することはできません。

Q23) 研究ノートは論文（①研究）よりも査読に通りやすいのですか。
A23) そのようなことはありません。前述のように，研究ノートと論文（①研究）とは基

本的な性格が違うものであり，査読の通りやすさとは関係がありません。論文（①研究）としてはやや自信がないものを研究ノートとして投稿するというのではなく，論文（①研究）と研究ノートの違いを明確に踏まえた上で，最もふさわしい投稿カテゴリーに投稿するようにしてください。

Q24)　7 枚以内に収まる論文は，研究ノートとして投稿した方がよいですか。
A24) これも前述のように，研究ノートを特徴づけるものはあくまでもその目的・性格であり，長さではありません。短くても，その目的・性格が論文（①研究）・論文（②実践）・論文（③調査）のいずれかに当てはまると考えられる場合は，その投稿カテゴリーに投稿するようにしてください。

投稿に際して

Q25) 査読者を指定することはできますか。
A25) できません。

Q26) 日本語教育と無関係のテーマでは投稿できませんか。
A26) 学会誌『日本語教育』の性格上，日本語教育と無関係，または関係の薄いテーマの投稿はご遠慮ください。ただし，学会誌委員会としては，日本語教育の範囲を可能な限り広く解釈し，そうした理由での門前払いは避けるように努めています。

Q27)『日本語教育』は年 3 回刊行されていますが，採用されやすい号，採用されにくい号はありますか。
A27) ありません。どの号に投稿していただいても同じ基準で査読されます。

Q28) 投稿の原稿は「必着」とありますが，多少遅れても受け付けてもらえますか。
A28) 期限を過ぎて投稿された原稿は受理されません。次号への投稿を希望される場合は、改めて投稿の手続きを取ってください。

判定について

Q29) 投稿後はどのような査読結果が戻ってきますか。
A29) 主査 1 名と副査 2 名の計 3 名の個人査読結果に基づき，主査と編集担当委員が協議して，「採用」「条件採用」「不採用」のいずれかの総合判定がされ，最終的に学会誌委員会で審議して総合判定が確定します。「条件採用」の場合には査読者のコメントとともに，採用の条件として修正の必要な点が示され，1 カ月以内に改稿することが求められます。改稿して投稿された原稿は，主査および編集担当委員によって修正内容が確認され，再度，判定されます。（Q30, Q31, Q32 も参照してください。）

Q30) 不採用になりました。自分の研究は行う価値がないと評価されたのでしょうか。
A30) 不採用になる理由はさまざまです。扱っているテーマは興味深くても，リサーチ・デザインを根本的に直さなければならない場合には不採用になりますし，基本的にはよい内容でも，訂正箇所の分量があまりにも多い場合には不採用になります。査読内容は，3 名の査読者による厳正な審査に加え，学会誌委員会でも慎重な議論を経て，投稿者の手元に届きます。査読内容をよく読んで，そのコメントをもとに研究を続けていけば，きっとよいものになると思います。

Q31) 不採用になりました。同じテーマで再び投稿することは認められないのでしょうか。

A31) 新規のものとして投稿することは認められています。しかし，不採用という判定が下されたということは，その論文に何らかの問題点があったということを意味します。あらためて投稿するにあたっては、一定の時間をかけて，丁寧に検討・修正を行う必要があります。同じテーマで再び投稿する際には，できるだけ慎重であってほしいですし，投稿する際には，不採用時の査読コメントを十分に反映させた上での投稿を心がけてください。

Q32) 条件採用になりました。直すように指示された箇所以外で，気になるところが出てきました。直すことはできますか。

A32) 条件採用は，主査 1 名，副査 2 名の査読のプロセスを経た後，学会誌委員会として検討されて当該論文が掲載に値すると判断されたものです。したがって，採用の条件として示された内容は修正が必要ですが，それ以外の修正は認められていません。軽微な誤字・脱字の修正については，修正内容説明書に記載し報告してください。

公益社団法人日本語教育学会学会誌委員会（2024 年 12 月改定）